

むきばんだ花だより 3月

2016. 3. 5

「啓蟄や豎穴住居の戸を上げて」
もと



むきばんだ史跡公園の春を代表する
オオバヤシャブシとアオモジ



初夏には緑の葉をまとい、きれいな花を咲かせる
アロヨポですが、早春の今はごらんとおりです。

幹や枝から気根を出して他物をはい登り、
長さ 7~10m に達することもあるそうですが、
他物を捕まえられなかった気根は なにも役
に立っていないのでしょうか。



気根あり
気根なし

他物を捕捉するためどの枝に気根を生やすか
条件があるのでしょうか。

ゴジラの背中
みたいな気根

膨らみ始めた蕾

ところで、下の 2 枚の写真が同時期に撮影されたヒサカキって思えますか？



左は薄黄緑色の小粒青豆のよう。
右は黒胡麻のように真っ黒です。

また、開花している蕾(つぼみ)もあり、
パッと見ると左に似ていますが、
拡大すると萼(がく)は黒いのが分かります。

太陽の当たり具合などの条件により
個体差があるようです。

サカキやヒサカキに
古人は何を感じていたのでしょうか。
緑の清新さであり、豊穡や多産であり、生
命力そのものなのでしょうか。

【サカキとヒサカキ】

どちらもツバキ科の常緑樹ですが、ヒサカキはサカキより葉が小さく、葉のまわりがギザギザしているのが特徴です。サカキといえば、昔から神事に使われる木として知られています。『古事記』や『日本書紀』の神話でも、「真坂樹(まさかき)」の上枝に八尺瓊の玉、中枝に八咫鏡、下枝に御幣を懸けて、神事をおこなったり、天皇を迎える儀式をおこなっています。サカキは寒い地域(関東以东・高地・沿岸部)には生えないので、そういう地域では神事でもサカキの代わりにヒサカキが使われます。



サカキ

3/4



ヒサカキ

【遺跡でみつけたサカキ・ヒサカキ】

遺跡の出土例でいえば、近畿・中国地方では、斧の曲柄(膝柄)にはサカキ・サカキ属、直柄はアカガシ亜属がよく使われおり、柄の形状によって木の材質が使い分けられていた様子がうかがえます。曲柄というのは、木の幹とそこから出た枝の付け根を利用した柄のことです。

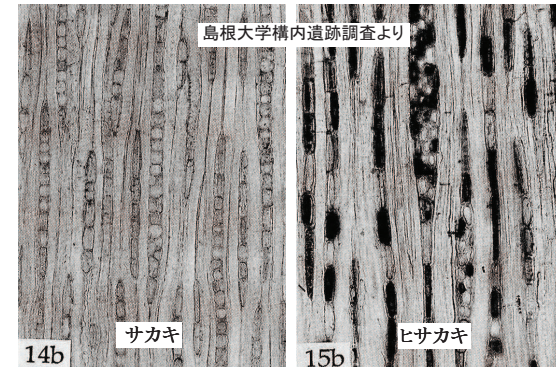
曲柄の斧は、力任せに木にうちつけるような斧ではなく、刃先を細い柄でコントロールしながら柄をしならせるように当てていく斧なので、堅くて曲がらない木よりも、しなる木の方が適していると考えられます。近畿以西から東北までの遺跡で出土した、縄文時代から古墳時代の 953 点の斧の柄の材質を調査した結果、いちばん多いのはコナラ属クスギ節で 154 点、その次に多いのがサカキ 132 点でした(鈴木三男・能城修一「西八木層出土木材の樹種」『国立歴史民俗博物館研究報告』第13集より)。



青谷上寺地遺跡フォーラムで復元された曲柄の斧(木材不明)

曲柄のなかには、数は少ないですが、ヒサカキが使われた例もあります。そして現在、妻木晩田遺跡の周辺で確認されているのは、すべてヒサカキです。妻木晩田遺跡では木製品が出土していないのではありませんが、同じ頃の青谷上寺地遺跡では、材質がわかった木製品のなかにサカキ 45 点、ヒサカキ属 2 点があります。斧の柄でいちばん多いのはサカキで、やはり曲柄でした。ただ、青谷上寺地遺跡で出土した種子をみると、弥生時代後期・古墳時代・奈良平安時代の地層でヒサカキ属は出土していますが、サカキは見当たりません。なぜ？

サカキと樹種同定されたなかにヒサカキがまぎれこんでいる可能性はないのかなあと、つい疑いたくなりますね。遺跡で出土した木製品の材質同定は木材組織を顕微鏡で観察しておこないます。自然木で作成する標準プレパラートでみると、細胞の違いは明白で、見間違えることはなさそうです。でも、どうして青谷上寺地遺跡では、サカキをよく使っているのに、遺跡で種子が出土しないのか、やっぱり気になりますね。



樹種同定をする際に自然木から作成した標準プレパラート

いずれにしても、妻木晩田遺跡周辺のヒサカキも、弥生時代のヒサカキの子孫たちと考えていいでしょう。そう思ったら、一見地味なヒサカキも、存在感がある木に見えてきませんか。

★むきばんだを歩く会★

- 指導：鷲見寛幸先生(鳥取県自然観察指導員)
- 毎月第1土曜日午前9時30分～正午
- 入会金 2000円 毎回資料代 300円 いつでも、どなたでも入会可能です
- 問い合わせ：むきばんだ応援団「むきばんだをあるく会」